

ゆかりの旧都ペテルブルグで初めての B・ピウスツキ展

井上紘一

サンクトペテルブルグのロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館(クンストカメラ)は、初のブロニスワフ・ピウスツキ企画展を開催しました(2019.12.6~2020.4.2)。タイトルは「ブロニスワフ・ピウスツキの諸世界：人類学民族学博物館蔵資料から」。

同館はピョートル大帝の命で 1714 年に創設された「クンストカメラ(珍品陳列室)」に淵源するため、2014 年には 300 年祭を挙行了しました。クンストカメラは 1836 年の科学アカデミー定款によって専門別 7 博物館とピョートル 1 世室に分割され、民族学博物館は 1844 年に誕生しました。クンストカメラに同居する人類学博物館と民族学博物館は 1878 年に合併して人類学民族学博物館(以下、略称 MAE)を名乗り、帝都創建 200 周年の 1903 年以来ピョートル大帝の名を冠しています。ロシア革命後はソ連科学アカデミー傘下の民族学研究所として黄金期を迎えたものの、1934 年の科学アカデミー本部モスクワ移転以降、同研究所レニングラード支部の地位に甘んじていました。ソ連崩壊後は華麗な歴史を象徴する上記の名称に復帰しています。MAE としての歴史は 1 世紀半足らずですが、今や五大陸の人類文化遺産 120 万件を収蔵する大博物館、1727 年ヴァシリイェフスキー島のネヴァ河畔に建立されたクンストカメラ本館を今も踏襲しています(写真 1)。

MAE のピウスツキ・コレクション

ブロニスワフ・ピウスツキ(1866~1918)は学業期の 2 年弱(1885.8~1887.5)をペテルブルグで過ごしたので、きっと MAE を訪ねる機会があったでしょう。それはともかく、極東流刑中のピウスツキ(1887.8~1905.12)は、MAE の依嘱でアイヌとウイльтаの民族資料収集に従事(1902.7~1905.6)、大部分の採集標本を MAE へ納めました。1903 年夏にはロシア地理協会が派遣したヴァツワフ・シェロシェフスキの北海道アイヌ調査に参加、その際の収集品も MAE に納入されています。科学アカデミー・社会学研究所シベリア極北研究センターのヴェロニカ・ベリヤイェヴァ=サチュク研究員(現 MAE 上席研究員)によると、ピウスツキ(とシェロシェフスキ)が 1902-05 年に収集した MAE 所蔵標本の総数は 1,396 点、内訳は(若干のウイльта標本も含む)アイヌ標本 1,169 点、ニヴフ標本 79 点、その他(シェロシェフスキが満州や中国本土で採集したモンゴル人・中国人資料—K.I.)148 点だそうです[Beliaeva-Sachuk: 158-160]。つまりピウスツキたちはサハリンと北海道で採集した原住民標本 1,248 点を MAE へ納入し、およそ 700 点がエンチウ(樺太アイヌ)、300 点は北海道アイヌにかかわるようですが、エンチウ資料は世界で最大・最良のコレクションです。

MAE のピウスツキ・コレクションは一部が常設展示されていますが(写真 2)[*The World of the Ainu*: 59]、まとまった形での出展デビューは 1991 年、サハリン州郷土博物館がピウスツキ生誕 125 周年に開催した第 2 回ピウスツキ国際会議「B・O・ピウスツキーはサハリン諸民族の研究者」の特別展でした。MAE から 70 点、ウラヂヴォストクの沿海地方総合博物館から 4

点を借用した同館は、館蔵アイヌ標本も併せて 96 点(図録は 102 点収録)のピウスツキ収集品を開陳しました[図録『樺太アイヌの民具』]。次は 2013-14 年、小樽市総合博物館と九州国立博物館が MAE と組んで、「ロシアが見たアイヌ文化：ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより」と題する「アイヌ工芸品展」を小樽と福岡で開催、展示された MAE 蔵アイヌ資料 141 点(エンチウ 87、北海道アイヌ 43、千島アイヌ 15)の 100 点はピウスツキらの収集品(エンチウ 70、北海道アイヌ 30)でした[図録『ロシアが見たアイヌ文化』]。私たちはピウスツキが自ら採集したアイヌ標本の実物を、日本で初めて瞥見する機会に恵まれました。

MAE におけるピウスツキ企画展

そこで今回のピウスツキ企画展は通算で 3 回目ですが、ペテルブルグの MAE での開催は、1 世紀超の収蔵期間で初めての快挙です。企画展の開幕には、クンストカメラの 305 回誕生日に当たる 12 月 6 日がわざわざ選ばれた由、クンストカメラ=MAE=ピウスツキの関係を想起する日になりました。この際はロシア帝国とその社会がピウスツキ畢生の仇敵だった事実を、しかと肝に銘ずべきでしょう。

残念ながら私は同展参観の機会を逸しましたが、以下では関連情報をまとめて私なりの報告を記します。まず企画と展示構築を担当したのはアンドレイ・ソコロフ MAE 研究員とヴェロニカ・ベリャイエヴァ=サチュクさんです(写真 3)。彼らは MAE コレクション 1,248 点から精選した 53 点(エンチウ 38、北海道アイヌ 14、ニヴフ 1)を、塔室 2 階回廊に設置された大小 8 個の「ガラス窓」内に陳列、随所ではピウスツキ撮影の関連写真など 19 点を開陳しています。それぞれに<手工芸><日用品><狩猟漁撈><女の衣装><男の衣装><子供の世界><信仰><熊祭り>と銘打たれた「窓」には、5~10 点の関連標本が象徴的に配置され、例えば、<子供の世界>(男児用毛外套、玩具など 5 点)(写真 4)、<信仰>(シャマンの手太鼓、イナウ、奉酒篋など 10 点)(写真 5)、<熊祭り>(熊檻模型など 6 点)(写真 6)は専らアイヌ標本で構成される傍らで、<日用品>の「窓」には「ニヴフの扇」(写真 7, № 4)も見出されます。展示の様子は、ヴェロニカさんがロシア語で解説する企画展案内ビデオ(一時休館直前の 3 月 13 日収録)で垣間見ることも可能です*1。

12 月 6 日の開会式では、MAE の新刊書『ブロニスワフ・ピウスツキの目を通して見たアイヌの世界：クンストカメラ・コレクション』[The World of the Ainu]も披露されました。同書は 100 点の館蔵標本(エンチウ 65、北海道アイヌ 34、ニヴフ 1)とピウスツキ撮影写真 37 点(エンチウ 35、ニヴフ 2)を収録する<第 3 の図録>、解題と本文の執筆者はソコロフ研究員とヴェロニカさんです。実に不思議なことに、そこには「企画展」への言及が全く見出されません。ヴェロニカさんによると、アンドレイ・ゴロヴニョフ MAE 館長が企画展を着想したのは何と 2019 年 9 月で、全作業が僅か 2 ヶ月半で完遂されたそうです。図録用原稿はそれ以前に揃筆済みだったのでしょう。

今一つ注目されるのは、ポーランド政府系財団「ポーランド=ロシア対話・理解センター」が「前付け」に併記されている点です(巷間では同センターが刊行経費を支弁、発行部数 500 冊を MAE と折半したと伝えられます)。

企画展開会式に先立つ 12 月 2 日と 3 日、ポーランドでは『ピウスツキの目を通してみたアイヌの世界』の出版披露イベントがワルシャワとクラクフで挙行され、ゴロヴニョフ館長とヴェロニカさんが列席しました*2。

ヴェロニカさんの私信は「ピウスツキの仕事がアイヌだけ、また学術のみに限定されず、サハリン住民の啓蒙活動や生活改善にもかかわったことを紹介したい」と記しています。今回の企画展と図録は確かにその一端の開示に成功しているとはいえ、いまだ道半ばと言わざるをえません。MAE 所蔵標本 1,396 点を駆使して「ピウスツキの諸世界」が全面開陳される日を鶴首して待ちたいと思います。

最新情報によると MAE はコロナ禍の猖獗で閉館を強いられ(3.17~7.13)、企画展も中断されていましたが、7 月 14 日再開、同月 27 日までの会期延長が決まったそうです。

謝辞

本稿執筆に当たり V・ベリャイエヴァ=サチュク MAE 上席研究員から関連情報と写真を頂戴しました。この場をお借りして謝意を表します。 [2020.7.17 札幌]

参考文献

Beliaeva-Sachuk, Veronika A., “In the Shade of the Two Eagles: Museum Collections of Polish Researchers and Travelers in Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography (Kunstkamera) of the Russian Academy of Sciences”, *Etnografia*, № 4: 151-171, St Petersburg: MAE RAS (2019) * <http://etnografia.kunstkamera.ru/en>

『樺太アイヌの民具』(ヴラヂスラフ・ラティシェフ、井上紘一共編、露・英・日本語併記版) 札幌：北海道出版企画センター (2002)

『ロシアが見たアイヌ文化：ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより』(露・日本語併記版) 札幌：アイヌ文化振興・研究推進機構 (2013)

*https://www.kyuhaku.jp/exhibition/exhibition_pre111.html;

<https://kyuhaku-museum.shop/shopdetail/000000000056>

The World of the Ainu through the Eyes of Bronisław Pilsudski: Kunstkamera Collections (parallelly published in Russian, Polish & English), Saint Petersburg: MAE RAS, with auspice of the Centre for Polish-Russian Dialogue and Understanding in Warsaw (2019)

* <http://lib.kunstkamera.ru/rubrikator/06/978-5-88431-372-9>

Links

*1 <https://www.youtube.com/watch?v=aunmXUigGi0>

*2 http://www.cprdip.pl/wydarzenia,debaty_i_wyklady,626,swiat_ajnow_oczami_bronislawa_pilsudskiego.html

写真1



写真2



写真 3



A・ソコロフ研究員(左)と V・ベリャイエヴァ=サチュク上席研究員(右)
背景写真は、ニヴフの子供たちに囲まれた B・ピウスツキ(中央)

写真 4



写真 5





